

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617002

研究課題名(和文)映像アーカイブ環境を活用したメディア文化学の確立：東日本大震災の放送を例として

研究課題名(英文) A study of media culture about television programs on the 2011 Tohoku earthquake and its aftermath

研究代表者

西 兼志 (NISHI, KENJI)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：20599550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、デジタル技術によって現在、整備されつつある映像アーカイブ環境を全面的に活用することで、テレビを中心としたメディアについての文化学の提案、確立を目指すものである。特に、2011年3月に起きた東日本大震災をめぐる放送は、60年目を迎えたわが国のテレビを中心としたメディア文化のあり方を凝縮して提示するものであった。本研究では、この一連の放送を対象とし、アーカイブ化された番組群を詳細かつ具体的に分析すると同時に、現在のデジタル環境をめぐるメディア学、アーカイブ学の観点から、メディアをめぐる文化学の確立を試みた。

研究成果の概要(英文)：This is a study of media culture, especially of television, making the most of digital archive, which is now dramatically being generalized in our country. In this context, television programs on the 2011 Tohoku earthquake and its aftermath represent in a very condensed way the history of Japanese television culture in general which celebrated 60th anniversary in 2013. Analyzing in detail these programs, this study established a theory which elucidates our media culture, that of television in particular, in a digitalized media environment

研究分野：メディア研究

キーワード：メディア研究 アーカイブ研究 東日本大震災 コンテンツ分析 デジタル・ヒューマニティーズ デジタル・スタディーズ メディア文化

1. 研究開始当初の背景

(1) デジタル・アーカイブ環境の整備

わが国では、デジタル技術の一般化を背景として、映像アーカイブが整備されつつある。たとえば、NHKは、2003年に「NHK アーカイブス」を埼玉県川口市に開設し、2008年からは、インターネットを利用した「NHK オン・デマンド」を開始するなど、アーカイブ化されたコンテンツを公開するまでになっている。また、「国立情報学研究所」でも、2009年以来、放送されたあらゆる番組のアーカイブ化を行い、研究活用を実現している。世界的に見ても、このようなデジタル映像アーカイブ分野の最先端の施設である「フランス国立視聴覚研究所 INA」は、いち早く1992年に、フランス国内で放送された番組を網羅的に収集する法定納入制度を確立し、98年には研究施設である「Inathèque」を設立した。さらに、2006年からはインターネットによるアーカイブ映像の公開を実現している。

このようなアーカイブの普及によって、いまや大規模な専門施設にととまらず、個々の研究者も研究テーマに関連したコンテンツを網羅的に収集し、みずからでアーカイブを構築することができるまでになっている。本研究も、このようなデジタル技術によって可能になったメディア環境を活用するものである。特に、2011年3月に発生した東日本大震災の関連番組については、発生後、1週間分の網羅的にアーカイブされた番組群に加えて、それ以降に放送された震災関連番組をアーカイブ化することで、それらをコンテンツ分析の俎上に載せることができるようになったことが技術的な背景となっている。

(2) メディア理論の展開

大震災をめぐる一連の放送の展開——通常放送の中断→現場からの中継→スタジオでの解説→キャスターの現場への派遣＝現場のスタジオ化——は、テレビというメディアの歴史的な展開そのものを辿り直すものであった。その意味で、この一連の報道を捉え直すことは、テレビを中心に過去60年で築かれてきたメディア文化の総体を捉え直すことになる。また、現在のデジタル技術によって可能になったアーカイブ環境は、メディアの理論にとって新たな課題を突きつけるものでもある。メディア理論では、出版をモデルにした「作品」から、テレビなどの放送をモデルにした「フロー」へとメディアは展開してきたとされている。このなかで、テレビというメディアにおいては、中継を中心にした「パレオTV (旧テレビ)」から、スタジオ内で繰り広げられるエンターテイメントを中心にした「ネオTV (新テレビ)」へと変遷してきたとされる (ウンベルト・エーコ)。研究代表者の西は、このようなメディア理論の観点から、メディア・コミュニケーションについて、具体的なコンテンツ分析と同時に、理論的深化を試みてきた (水島、西

2008)。

本研究も、このようなメディア研究の展開を背景として、東日本大震災をめぐる放送アーカイブを総体的に捉え、具体的な番組の分析を行い、さらにそれに基づいて、日本のメディア文化についての一般理論を確立しようとするものである。

2. 研究の目的

(1) メディア文化学の確立

本研究の目的はまず、震災をめぐる放送されたコンテンツを対象とし、この膨大な量のコンテンツの総体を、これまで蓄積されてきたメディア理論の知見によって体系的に分析することである。それと同時に、具体的なコンテンツを分析することによって、メディアの理論を実証的に裏付けることを目指している。さらなる理論的課題としてはまた、これまでのメディアの変遷をふまえ、現在のデジタル・アーカイブ環境をメディア論的に捉え返し、位置づけることも目的である。このように、具体的なコンテンツ分析と、メディア環境の理論化を往還することで、メディア文化学を確立することが、本研究の第一の目的である。

(2) アーカイブ環境の整備

このようにアーカイブ化されたコンテンツの総体を対象にして、理論化・体系化することは、現在、普及しつつあるアーカイブ環境そのものの整備に資するものでもある。現在、アーカイブにとって問題となっているのは、単にコンテンツを保存していくのではなく、保存された膨大なコンテンツに対するアクセス可能性を広く保証し、アーカイブをひとつひとつに開いていくことである。そのなかで、理論的・体系的な観点からなされコンテンツ分析は、コンテンツを整理し、アーカイブを編成していくための重要なメタ・データを提供するものである。そうすることで、アーカイブ化を推進している諸施設に対しても、アーカイブを編成していくうえで、具体的かつ有効な提言をできるようにすることも、本研究が目的とするところのひとつである。

3. 研究の方法

東日本大震災についてアーカイブ化された番組コンテンツ——震災後一週間に放送された番組の総体、および、それ以後に放送された震災関連番組——を対象とし、これまで確立されてきたメディア・コミュニケーションの理論の観点から、記述と分析を進めていく。このようなコンテンツの記述・分析にあたっては、フランス国立ポンピドゥーセンター「リサーチ&イノベーション研究所 IRI」が開発した映像解析ソフト「タイム・ライン」を活用し、具体的なコンテンツに対してアノテーションを付加し、そうして得られた知見によって、これまでのメディア理論を更新す

ることで、新たなメディア文化学的确立を目指す研究を行っていく。

(1) アーカイブ環境の活用

本研究の基礎となるのは、デジタル技術によって可能になったアーカイブ環境を活用し、こうして蓄積される膨大な量のコンテンツを詳細に記述・分析していくことである。また、こうして記述・分析された情報をもとに、メディア・コミュニケーション理論を更新する知見を導き出し、メディア文化についての一般的な理論として体系化していく。さらに、これらの知見を、研究協力関係にある機関を通じて共有・公開していくと同時に、アーカイブ化を推進している諸施設に対して還元することで、現在一般化しつつあるわが国のアーカイブ環境をさらに整備していくための有用な提言を行っていく。

まず、震災後の1週間に放送された番組が網羅的にアーカイブ化されており、それを研究のための素材として利用することができる環境が整っている。また、それ以降に放送された震災関連番組に関しては、パーソナルコンピュータにテレビ・カードを装備することで構成されるチャンネル・サーバーを用いて、随時、アーカイブ化し、研究対象となるコンテンツを随時、拡充していくことができる。

(2) コンテンツ分析

本研究ではまず、震災後1週間分のアーカイブされたコンテンツの総体を詳細に分析・記述し、放送されたトピックの推移を明らかにしていく。この記述・分析においては、フランス国立ポンピドゥーセンターの「リサーチ&イノベーション研究所 IRI」が開発した映像解析ソフト「タイム・ライン」を使用する。このソフトウェアは、記述・分析する映像を読み込ませると自動的にカットを認識し、そこから任意に選ばれたショットやシーンに対して、分析者がみずからの分析やコメントをタイム・ラインとして自由に付け加えていくことができる。



(タイム・ラインを使用した分析)

このソフトウェア上で分析・記述を行うことで、対象となる映像と、それに対するコメントを同一平面上で処理することができる

わけだが、それによって、映像コンテンツについて詳細かつ実証的な分析が可能になる。特に、今回の震災のように、同じ出来事を複数の放送局が一斉に報じたような場合、それらを同一平面上で記述・分析することは、その総体を捉えるうえで欠かすことができない。こうすることで、各局の放送の推移が視覚的に一覧として捉えることができるため、その特徴を明確に把握し、新たな知見を実証的に導き出すことができる。また、分析の途上で得られた新たな知見を随時、付け加えていくことができるだけでなく、他の研究者のコメントや見方なども、新たなタイム・ラインとして付加し蓄積していくことができるため、記述・分析を随時、更新し、充実させていくことができることも大きな利点となっている。

(3) メディア文化学的确立

続いて行うのは、コンテンツの記述・分析から得られた知見をメディアの文化学として理論化・体系化していくことである。この段階で重要になるのは、これまで蓄積されてきたメディア・コミュニケーションについての理論である。本研究代表者は、メディア・コミュニケーションの観点から、コンテンツを具体的・実証的に分析した研究を発表しており、また、デジタル映像アーカイブ分野で世界をリードする「フランス国立視聴覚研究所 INA」において滞在研究を行うなどして、アーカイブ環境によって可能になる研究について十分に把握している。さらに、「NHK放送文化研究所」と行った共同研究においても、NHKで構築されてきたアーカイブを活用した研究を行ってきた。本研究においても、このようにして蓄積されてきた知見に基づいて、震災をめぐる放送アーカイブに取り組むことで、メディア文化学的确立を進めて行く。

また、1995年の阪神大震災や1986年のチェルノブイリ原発事故といった過去の大規模災害についての放送と比較することで、今回の東日本大震災についての放送のあり方の特徴をあぶり出すことができる。さらに、海外において、東日本大震災がどのように表象されたか、また、そのほかの2001年9月のアメリカ同時多発テロ、2005年のハリケーン・カトリナといった大規模な災害・事件についてはどのように表象されてきたかなどと比較することで、日本のメディア文化の特色を明らかにしていくこともできる。

最終的に、以上のような研究成果を総合・完成しながら公開・出版を行っていく。研究成果の公表と共有においても、「タイム・ライン」のような映像解析用のソフトウェアは大きな力を発揮することになる。というのも、分析の過程において、分析対象である映像と、それについての分析を同じ画面上で扱えることでまた、成果を提示する際にも、分析と分析対象を同一平面上で視覚的に表現する

ことができ、分析結果が直観的に理解できるようになるからである。

4. 研究成果

以上のような背景、目的、方法によって、震災関連番組を中心に番組アーカイブを構築し、アーカイブ化した番組群について、映像解析ソフト「タイム・ライン」を用いて、コンテンツ分析を進めてきた。この分析によって、震災関連番組を中心としたコンテンツ群からは、次のようないくつかの中心的なテーマが析出されることが明らかになった。

(1) 震災後一週間の番組の変遷

震災についての放送は、震災後の時間の経過のなかで、現場からの中継を中心とした報道番組だけでなく、ドキュメンタリーや情報番組へと多様化し、また、扱う観点についても、原因やメカニズム、影響を分析する科学的なものから、その社会・経済的被害の拡大、復興への道、さらに各個人の体験や対処にスポットを当てるものなど、極めて多岐にわたっている。

このようななか、震災以後一週間においては、まず、被災した地域が広範囲であったこともあり、各地から次々、飛び込んでくる情報や映像に圧倒され、通常の番組枠が廃棄され、延々と被害状況を伝えていくことが行われた。また、地震・津波による被害状況の中継から、原発関連へのトピックの移動も早々に行われ、「第10条通報」「第15条通報」についての言及が早い段階でなされていたことも確認できた。

しかし、震災から3日後、ちょうど週明けにあたったこともあり、徐々に、番組枠を拡大するなどのかたちで通常放送の姿を取り戻しつつ対応するようになっていった。また、現場に東京からキャスターや記者を派遣し、現場から中継をすることで、被災者の生の声を取り上げようとするなど、震災の規模に比して言えば、当初の混乱状況からの立ち直りは意外なほど早かったとさえ言えるものであった。

(2) 地図・証言の多用

震災について、もっとも多くの番組を放送してきたのはNHKである。その中心は、NHKのドキュメンタリーを象徴するともいうべき総合テレビの「NHKスペシャル」や、Eテレの「ETV特集」で放送されてきた番組群である。これらの番組枠では、災害の規模に対応するべく、単発で放送される番組だけでなく、複数の番組が製作されることでシリーズを形成する番組群が存在している。これらの多様な番組群について特に顕著であったのが、「地図」や「証言」が広く用いられていたことである。

証言に関しては、たとえば、NHKでは2012年一月以来、『証言記録 東日本大震災』を、ミニ番組である『あの日 わたしは ～証言記

録 東日本大震災～』とともにシリーズ化して放送している。あるいは、『東日本大震災 亡き人との“再会”～被災地 三度目の夏に～』は、被災者たちの神秘的というべき体験をめぐる証言を集めたもので、賛否あったものの、新しい『遠野物語』と言うべき番組として、新たな共同的記憶を紡ぎ出すものであった。

このような証言を記録する番組においても、被災地域が広範囲に及んでいたこともあり、その証言がどこに定位するかを示すにあたって地図は重要な役割を演じていた。しかし、震災をめぐるドキュメンタリー番組では、地図、あるいは地図を作ることを主題にした番組が多く見られたことがひとつの大きな特徴として挙げることができる。また、放射能のように、われわれの目には捉えられない環境リスクに対しては、地図のような視覚的手段は欠かすことができないものである。

たとえば、NHKスペシャル『震災ビッグ・データ file1～4』は、被災者たちが携えていた携帯端末の位置情報を集積したビッグ・データに基づき、CGを用いた地図を提示している。また、『ネットワークでつくる放射能汚染地図1～6』では、科学者たちのネットワークによって、放射能汚染の実態を描き出す地図そのものだけでなく、その地図を作成する過程も克明に記録されている。あるいは、『東日本大震災 巨大津波 その時ひとはどう動いたか』は、個々の被災者の震災時の動きに注目し、それを記録している。さらに、『シリーズ 大震災発掘』では、古地図が今回の被災状況と重ね合わせられることで、空間的な広がりだけでなく、時間的な広がり観点から、この震災が捉えられていた。



(『ネットワークで作る汚染地図』より)

以上は、NHKで放送された震災関連のドキュメンタリー番組群についてだが、民放のニュースを始めとした報道番組でも、CGや古地図を活用して、今回の震災を空間・時間的に位置づけようとする試みが多く見られた。

(3) 表現の多様化：ジャンルの混淆

さらに、今回の震災関連番組で特徴的だったのは、ドキュメンタリー番組であってもドラマに接近するなど、ジャンルが混淆しながら、多様なかたちで大震災が表現されたこと

である。

たとえば、これまでも、第二次世界大戦については、ドラマ表現が使用されることはよく行われてきた。それは、実際の映像が残っていないため、記録映像に再現映像を加えることで、証言を補強することができるからである。またそれと同時に、単なる再現映像を超えたドラマ表現を採用することで、時間の経過とともに風化していくのを免れえない戦争についての記憶を伝承すべく、若い世代にもアピールしていくためのものである（このような傾向を代表するものとして、2013年12月に映画化され、また、2015年2月にはテレビ東京でドラマ化もされた『永遠の0』を挙げることができる）。

このようななか、今回の大震災をめぐる番組群の特徴は、震災後数年のうちに早くも、ドラマや「ドキュ・ドラマ」——ドラマとドキュメンタリーが混淆した番組——が製作されたことである（映画としては、石井光太のルポルタージュ『遺体 震災、津波の果てに』を原作とした『遺体 明日への十日間』が製作されている）。このような番組として挙げられるのは、震災後1年を経ずして、2012年3月4日にテレビ東京系列で放送された『明日をあきらめない...がれきの中の新聞社～河北新報のいちばん長い日～』である。この番組は2011年10月に出版された『河北新報のいちばん長い日』（河北新報社）を原作とするものだが、番組の冒頭と最後が現地からのルポルタージュから構成されており、ドラマでありながら被災地の映像や写真を数多く織り込むなど、典型的なドキュ・ドラマとなっている。



（ドラマに埋め込まれた震災の映像：津波の映像を観る役者たち（『明日をあきらめない...がれきの中の新聞社～河北新報のいちばん長い日～』より））

あるいは、NHK スペシャルの枠でシリーズ化して放送された『メルト・ダウンⅠ～Ⅴ』や『MEGAQUAKE 巨大地震Ⅰ～Ⅲ』『THE NEXT MEGAQUAKE』でも、いわゆる再現映像を量的にも質的にも超えたドラマパートが大きな役割を演じている。

このようなドラマ化の傾向は、第二次世界大戦をめぐる表象の場合とは大きく異なっ

たものだと言えるだろう。たしかに、年月を経ることで多かれ少なかれ経験される記憶の風化に抗するためのひとつの方策として、あるいは、震災直後の原発内部の様子など、映像が残っていないがために再現映像が必要とされたのだと考えることもできるだろう。しかし、今回の震災においては、多くの国民が地震、津波、そして、原発の水蒸気爆発などの映像にリアル・タイムで接したわけであり、また、被災者たち自身が携帯端末で記録したものなど、かつてないほど大量の映像があふれていた。このような状況のなかで、実際の映像に加えてドラマ表現が採用されたのは、映像の不在や不足を補うよりむしろ、震災のリアルな体験——たとえメディアを通じたものであっても——から身を離さんがためのことであったとも言わねばならないものである。この意味で、ジャンルを横断することによる表現の多様化は、現在のメディア文化のあり方を特徴づける傾向のひとつとして挙げることができるだろう。

(4)メディア文化学の素描

以上のように、震災関連番組群の分析からまず指摘できるのは、ドラマやドキュメンタリー、情報番組、ニュース、ルポルタージュといった諸ジャンルの混淆現象である。そして、このような混淆を押し進める要因となっているのは、地図に関して確認されたCGによる映像や、ドラマでも用いられる証言や記録映像といった現実の断片というべき映像の多用である。たとえば、CGによる映像は、現実を映し出した映像からなるドキュメンタリーを現実から引き離し、フィクション化すると同時に、ドラマに使用されることで、それを科学的かつ映像的に裏付けることで、フィクションを現実に定位させることにもなる。また、このような映像表現によるジャンルの混淆現象は、日本のみならず、世界的にも確認される傾向でもある（Isabelle Veyrat-Masso, *Télévision et histoire, la confusion des genres : Docudramas, docufictions et fictions du réel* [イザベル・ヴェイラ・マッソ『テレビと歴史、ジャンルの混乱：ドキュ・ドラマ、ドキュフィクション、現実的なもののフィクション』], De Boeck, 2008)。

このような分析結果の内容に加えて、その方法面において、本研究は、デジタル環境が一般化することで身近なものとなった映像アーカイブや、映像解析ソフトウェアによって支えられたものであった。従来、映像と、映像に対する記述・分析を同一平面上で行うことが困難であったが、「タイム・ライン」のようなソフトウェアによって、このような困難を乗り越えることができ、研究対象である映像と、研究結果である文字という異なったメディアを区別なく扱えるようになったわけである。このような環境を活用した本研究は、現在、人文科学において世界的な潮流になりつつあるデジタル・スタディーズやデ

デジタル・ヒューマニティーズの展開に位置づけられるものであると同時に、その発展に資するものでもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 西兼志 「イナテーク：世界最大のデジタル映像・音声アーカイブ」『INFORIUM』vol.3、NTT データ、p.17、2015年6月。

② 西兼志 「「ハビトゥス」再考：初期ブルデューからの新たな展望」『成蹊人文研究』第23号、pp.27-61、2015年3月。

③ 西兼志 「バラエティー、コミュニティ、コミュニケーション：コミュニケーション番組としての『探偵！ナイトスクープ』」『成蹊大学文学部紀要』第50号、pp.1-14、2015年3月。

④ 西兼志 「新たな文字を構想する」『情報メディア学会』第24号、pp.2-3、2012年4月。

[学会発表] (計4件)

① 西兼志 (シンポジウム・モデレーター) 「ハイブリッドリーディングとデジタル・スタディーズ」日本記号学会、東京大学駒場キャンパス、2014年5月25日。

② 西兼志 「フランス INA と映像アーカイブをめぐって」国立国会図書館、2014年2月21日。

③ 西兼志 (シンポジウム・モデレーター) 「未来へのアーカイブ：原発事故・放射能汚染の過去／未来」放送人の会、東京大学駒場キャンパス、2013年7月13日。

④ 西兼志 (シンポジウム・モデレーター) 「テレビ研究における〈口述資料〉〈証言〉の可能性」日本マスコミュニケーション学会、東京大学本郷キャンパス、2012年12月1日。

[図書] (計5件)

① 西兼志 (分担執筆単行本) 「コミュニケーションの vector としての〈キャラ〉: indi-visual コミュニケーション」石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストン編『デジタル・スタディーズ 2: メディア表象』東京大学出版会、2015年7月(発行確定)。

② 西兼志 訳 (分担翻訳単行本)、ベルナル・スティグレル著「カタツムリの目的論＝遠隔 論理: WiMax ネットワークを装備し彷徨する自己」石田英敬、吉見俊哉、マイク・フェザーストン編『デジタル・スタディーズ 1: メディア哲学』東京大学出版会、2015年6月(発行確定)。

③ 西兼志 訳 (翻訳単行本)、レジス・ドブレ著『大惨事 (カタストロフィー) と終末論: 「危機の予言」を超えて』明石書店、2014年4月、148p。

④ 西兼志 訳 (翻訳単行本)、ベルナル・スティグレル著『技術と時間 3: 映画の時間と〈難-存在〉の問題』法政大学出版局、2013年3月、410p。

⑤ 西兼志 (分担執筆単行本) 「メディア学」大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012年12月、pp.1248-1249。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

http://www.seikei.ac.jp/university/bungaku/teachers/nishi_k.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

西兼志 (NISHI, Kenji)

成蹊大学・文学部・現代社会学科・准教授
研究者番号: 20599550

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし